

[Report]

An analysis of students' reports on the course "Basic Nursing Practice I", no. 1

— Focus on the effects of early exposure to clinical settings —

Tomoko Yamaguchi*, Noriko Ueno*, Takumi Ogata*, Tomomi Tsujino* and Masako Yano*

*Department of Nursing, Faculty of Nursing and Rehabilitation, Aino University

Abstract

The purpose of this research is to comprehend the effects of early exposure to clinical settings in the course "Basic Nursing Practice I", and to specify educational problems. We analyzed the reports submitted by 57 students after practice in this course. As a result, 368 codes were extracted and classified into the categories of "the effects of early exposure to clinical settings", "learning for the due fulfillment of course objectives", "the strain and uneasiness felt in regard to practice", and "other contents of learning". Students had acquired knowledge and techniques to fulfill course objectives in spite of their uneasiness and strain regarding practice, as well as the communication skills required from a nurse, and had deepened their comprehension of the ability to build relationships based on mutual respect. In addition, coming into contact with patients and nurses had turned vague images of nursing entertained by students into concrete visions, and had motivated them to be well aware of their duty as nursing students and to study harder. The research suggests that we must elaborate plans for our lecture and practice courses to keep and enhance these learning effects.

Key words : early exposure to clinical settings, nursing practice, nursing student, student's report

初回基礎看護学実習のレポートの分析（その1）

—— 早期体験学習の学習効果に焦点をあてて ——

山口 智子*, 上野 範子*, 緒方 巧*
辻野 朋美*, 矢野 正子*

【要 旨】 本研究では、早期体験学習としての基礎看護学実習 I の学習効果を把握し、実習のあり方や学生を教育していく上での課題を明確にしていくことを目的とし、実習終了後に提出した 57 名の課題レポートの内容を分析した。その結果、368 のコードが抽出され「早期体験学習の成果」「実習目標にそった学び」「実習に関する緊張・不安」「その他の学び」のカテゴリに分類された。学生は実習に対する不安や緊張を抱えながらも、実習目標にそった知識・技術を習得し、特に看護師として基本となるコミュニケーション技術を学び、相手を尊重し人間関係を構築するために必要な能力について学んでいた。また患者や看護師との関わりから、将来の看護師像を具体的な目標に転換し、看護学生としての自覚とその後の学習意欲へとつながる学習の機会となっていた。そしてこの学習効果が継続・発展していくような講義・演習の展開の工夫が必要であることが示唆された。

キーワード：早期体験学習、看護学実習、看護学生、レポート

I. はじめに

医療の高度化、患者の高齢化・重症化、平均在院日数の短縮などにより、看護業務が多様化・複雑化している。看護職は臨床のみならず地域や職場・在宅などの幅広い領域において、人々の多様な健康ニーズに貢献することが求められ、拡大された看護の場で活躍する看護師を育てる、看護基礎教育に対する期待が高まっている。このような期待をうけ看護基礎教育の大学化が進み急増している中で、各大学がそれぞれの理念に基づく人材育成と教育課程を策定し、特色ある教育活動の展開、独自の教育方法の開発を行っている。

本学看護学科では「現代社会の多様な要請に応える

ために、豊かな教養と高い倫理観を備え、保健・医療・福祉従事者の一員として、さまざまな健康レベルの人々に対して、適切な判断のもとに必要な看護ができる専門職業人を育成する」という教育目的のもと、131 単位のカリキュラムの中でおよそ 20% にあたる 27 単位を臨地実習にあてている。臨地実習は学生にとって学内の講義や演習では学べないことを有形・無形に学ぶ機会にあふれており、学生が既習の知識を活用し、看護の対象者と直接かかわり、自らの看護を体験していく。それによって看護に対する関心と意欲を高め、対象者を理解することを学び、また看護の専門的思考過程としての看護過程を展開する経験を持ち、学生自身の看護観を形成していくことにつながっている。その一つとして基礎看護学では、早期体験学習に

* 藍野大学医療保健学部看護学科

取り組んでいる。

田中¹⁾らによると Early exposure とは、「早期に影響・作用を受ける（させる）こと」と訳され、教育の場において、低学年のうちから到達目標となる事柄に触れることによって学習の動機付けを行うプログラムである。一般に語学や音楽などの早期教育をさすが、近年、医学など知識以外の体験を伴う教育の場でも早期体験学習が導入されている。看護基礎教育に於いては、藤井ら²⁾の研究結果によると全国的に、Early Exposure として臨地実習を経験させる傾向にある。しかし1年次前期に行っている臨地実習は、見学実習であったり、臨地実習期間が半日から2～3日間のみであったり、実習場所が医療施設ばかりでなく高齢者・児童福祉施設などであった³⁻⁵⁾。

本学は2004（平成16）年開学以降、1年次の7月に基礎看護学実習Iを実施している。その目的は、実習病院の地域における位置づけや役割を知り、対象者を理解し尊重した態度で日常生活の援助を行うこと、そして看護師の役割を知ることである。この時期の学生は専門的知識は少なく、バイタルサイン（体温・脈拍・呼吸・血圧）の測定とコミュニケーションをとることに重点をおいている（表1）。

本研究では、医療の現場で看護活動を見学するばかりでなく、学生が受け持ち患者と接することでどのようなことを学んでいるか、1年次前期に実施している基礎看護学実習後のレポートを分析し、早期体験学習の効果を検討したので報告する。

表1 基礎看護学実習I実習目的・実習目標・行動目標

<p>【実習目的】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 対象者に対して適切な医療・療養生活を提供するという観点から、病院の地域における位置づけと役割、病院組織・機能、看護師の役割を知る 2. 健康障害を持ち入院生活を送っている対象者の理解と、相手を尊重した態度で日常生活の援助を行う <p>【実習目標と行動目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 病院の機能・役割を知る 2. 対象者のおかれている病室・病床環境を理解できる 3. 対象者及び看護師とコミュニケーションをとることができる 4. 健康障害及び入院・治療による、対象者の生活行動の変化を知る 5. バイタルサインの観察ができる 6. 実際に行われている日常生活援助の必要性や方法、その援助の科学的根拠を知る 7. 看護師に報告し、記録することができる 8. 看護師の役割を知る
--

II. 研究目的

学生が基礎看護学実習I終了後に提出した課題レポートの内容を分析し、本学の特徴である早期体験学習の学習効果を把握する。そして実習による効果を具体的に分析し基礎看護学実習Iのあり方や学生を教育していく上での課題を明確にしていくことを目的とした。

本研究では早期体験学習を、「入学後の早い時期に医療の現場に接すること（Early Exposure）で、看護を志す者としての人間性を養い、勉学に対するモチベーションを高め、受け身でなく積極的に自ら考え取り組むことの重要性を理解する学習」と定義した。

III. 対象と方法

1. 対象

2006年7月10日から7月14日までB病院で基礎看護学実習Iを行ったA看護系大学1年生の、臨地実習を通して患者・看護師とのかかわりを振り返り、感じたことや考えたことなどをまとめた課題レポートである。

2. 分析方法

課題レポートの内容から学生の学びや気づきを記述した一文を抽出しコード化した。そのコードの類似性に基づきサブカテゴリに分類後、カテゴリ化した。カテゴリの信頼性・妥当性を確保するために、分析は共同研究者間で合意が得られるまで検討した。

3. 倫理的配慮

A大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。対象者には成績評価終了後に、本研究の趣旨を説明し、研究への協力は自由意志であり、研究への協力の有無と成績とはなんら関係がないこと、また研究以外に得られたデータは利用しないこと、そしてデータは研究者によって厳重に保管し、データの処理が終了しだい処分することを口頭および書面で説明した。

レポートの匿名性を確保するため、次の手順で課題レポートを回収した。実習ファイル返却の際に課題レポートのコピーをとり原本とともに返却した。研究に同意の得られた場合は、課題レポートのコピーの学籍番号、氏名を記載した部分を切り取り、封筒に入れて回収した。同意の得られなかった場合には封筒のみ回収した。そして課題レポートのコピーの提出をもって

同意とみなした。

4. 基礎看護学実習Ⅰについて

1) 実習方法

(1) 実習期間

2006年7月10日から7月14日

(2) 実習場所

B病院の一般・老年・精神科など13ヶ所の病棟

(3) 実習目的・目標 (表1)

(4) 実習内容 (表2)

学生は実習期間中1人の患者を受け持つ。受け持ち患者は、コミュニケーションがとれ、日常生活援助を必要とする患者を原則とする。1グループ6～7人の学生に対し1名の教員が指導する。

5. 実習開始時点での履修終了単元

コミュニケーション、観察・情報収集、記録・報告、バイタルサイン (体温・呼吸・脈拍・血圧)、環境 (基本ベッドの作成)、安全・安楽、ボディメカニクスが終了していた。

表2 基礎看護学実習Ⅰ 実習内容

実 習 前	6月16日	基礎看護学実習Ⅰオリエンテーション： 実習目的・目標、行動目標と実習内容、実習方法、実習記録、実習評価、実習における留意事項、実習中の事故発生時の対処方法、交通ストライキ、地震・暴風警報発令時の対応、担当教員の紹介
	7月7日	基礎看護学実習前 総合演習： 身だしなみの確認、既習技術の練習等
実 習 中	7月10日	AM 看護部長による病院オリエンテーション、病棟オリエンテーション、病院内施設見学、受け持ち患者の情報収集 PM 病棟実習：受け持ち患者の情報収集・バイタルサインの測定、看護師が行うケアや援助の見学、カンファレンス等
	7月11日	病棟実習：受け持ち患者の情報収集・援助・バイタルサインの測定、看護師が行うケアや援助の見学、カンファレンス等
	7月12日	学内実習：連絡事項の確認、記録の整理、看護技術の練習、個人面談等
	7月13日	病棟実習：受け持ち患者の情報収集・援助・バイタルサインの測定、看護師が行うケアや援助の見学・カンファレンス等
	7月14日	AM 病棟実習：受け持ち患者の情報収集・援助・バイタルサインの測定、病棟最終カンファレンス等 PM 学内グループカンファレンス、学習発表会
実 習 後	7月18日	実習記録の提出 ・実習記録の整理と課題レポートの作成 ・基礎看護学実習Ⅰの自己評価

IV. 結 果

本研究の協力を依頼したA看護系大学1年生89名のうち、57名(64%)からデータを回収した。

57名の課題レポートから368のコードが抽出された。それらは16のサブカテゴリに分類され、さらに4つのカテゴリ(表3)【早期体験学習の成果】【実習目標にそった学び】【実習に関する緊張・不安】【その他の学び】に分類された。なお、本文中ではカテゴリを【】、サブカテゴリを「」とした。また、表中の()にはコード数を、[]内には記載率(%)を示した。記載率は該当するコードを何人の学生が書いていたかの比率である。

1. 早期体験学習の成果について (表4)

【早期体験学習の成果】の記載率は73.7%であり、「課題の明確化」「今後の学習への意欲」「実習の面白さ」「目標とする看護師像」の4つのサブカテゴリからなっていた。

「課題の明確化」

実習で初めて患者と接し、バイタルサインの測定やコミュニケーション、環境整備などの場面で学内演習のように実践できなかったことなど、サブカテゴリの中では一番多くの学生52.6%が記述していた。そして日頃の学生生活を振り返り学習不足を痛感し、また学習面ばかりでなく日常生活においても医療以外にも関心を持ち、人間性を磨いていく必要性など、自己の課題を明確にしていた。また事前にコミュニケーションやバイタルサインの測定ができることなど、目的を意識して実習に臨んだというコードが

表3 カテゴリとサブカテゴリ

()コード数 []記載率(%)

カテゴリ	サブカテゴリ
早期体験学習の成果 (93) [73.7]	課題の明確化 (35) 実習の面白さ (24) 今後の学習への意欲 (24) 目標とする看護師像 (10)
実習目標にそった学び (221) [94.7]	コミュニケーション (121) 日常生活援助の必要性・根拠 (36) バイタルサイン (29) 環境 (17) 看護師の役割 (11) 報告 (4) 生活行動の変化 (2)
実習に関する緊張・不安 (38) [38.6]	コミュニケーションの難しさ (17) 実習施設の特徴 (12) バイタルサイン測定の難しさ (9)
その他の学び (17) [24.6]	実習グループでの学び (6) その他 (11)

表4 早期体験学習の成果

() コード数 [] 記載率 (%)

サブカテゴリ	コード例
課題の明確化 (35) [52.6]	<ul style="list-style-type: none"> ・援助技術や医療に関する知識だけでなく、コミュニケーションにおける情報の豊富さや知識などの準備も必要であることを学んだ。 ・目的をもって情報収集する、何事にも疑問をもって考える。 ・看護師になるためには多くのことを学び、多くの人とコミュニケーションをとり、多くの経験が必要であると学んだ。
今後の学習への意欲 (24) [31.6]	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら学び、深め、次へのステップとして踏み出す重要性を認識し、これからの学校生活、実習においても自分と真剣に向き合っていきたい。 ・勉強し始めたところだけ先生の言葉と患者の笑顔を胸に、成長していきたい。 ・実習での経験をどのように生かしていくのか、何のための実習だったのか考えて、今後の勉強につなげていきたい。
実習の面白さ (24) [29.8]	<ul style="list-style-type: none"> ・実習での経験を通じ悩んだこと、うれしかったことがたくさんあったが、何よりも実際の患者との関わりが私にとって一番の教えとなった。 ・実際の患者と触れ合ってみて、教科書上では学べないことがたくさんあって戸惑いながらも、なにより自分のためとなった。
目標とする看護師像 (10) [17.5]	<ul style="list-style-type: none"> ・患者と同じ目線で物事を考え、行動できる看護師になりたい。 ・患者を大切な人として接していける看護師でありたい。 ・患者一人一人を考えることができる看護師になりたい。

表5 実習目標にそった学び

() コード数 [] 記載率 (%)

サブカテゴリ	コード例
コミュニケーション (121) [77.2]	<ul style="list-style-type: none"> ・患者にわかりやすい表現でコミュニケーションをとることが大切 ・言葉は発することはなくても、目線や表情でコミュニケーションが図れること。 ・基本は同じだが患者個々でコミュニケーションのとり方は違う。 ・コミュニケーションとはお互いの気持ちや立場を理解し、納得するための手段であると感じた。
日常生活援助の 必要性・根拠 (36) [45.6]	<ul style="list-style-type: none"> ・援助の理由・根拠を考えながら援助を行うことが大切。 ・得た情報から患者にとって適切なケアがわかる。 ・患者の訴えだけでなく、観察したことも踏まえて判断する。
バイタルサイン (29) [28.1]	<ul style="list-style-type: none"> ・何のために行う援助なのかを考え、患者の変化に気付きバイタルサインを測定することができた。
環境 (17) [14.0]	<ul style="list-style-type: none"> ・限られた環境の中で患者の安全のための工夫を学んだ。 ・自分自身も環境の1つであり患者の状態を左右する。
看護師の役割 (11) [17.5]	<ul style="list-style-type: none"> ・人と人とのつながり、患者を尊敬すると、笑顔を絶やさないとなどを実際にみる事ができた。
報告 (4) [7.0]	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師への連絡・報告は患者を援助する上で重要で、自分の言うことに責任を持たなければならない。
生活行動の変化 (2) [3.5]	<ul style="list-style-type: none"> ・普段はなんとなく日記をつけているが、レクリエーション後はすぐに部屋に戻ってうれしそうに日記を書いていた。

42%を占めていた。

「学習への意欲」

今回の実習での反省や学びを今後の学習や実習、学生生活にいかして成長したい、看護観を築いていきたい、1日1日を大切にしたいという内容を記述していた。

「実習の面白さ」

普段の講義とは違い教科書では学べないことを経験できたこと、患者の笑顔をみることで自分自身がうれしく、実習が楽しかったと感じていた。またスタッフの親切な対応で自分達が受け入れられ、評価されている喜びから充実した実習であったと実習を肯定していた。また患者や看護師、教員への感謝の気持ちも記述していた。

「目標とする看護師像」

実際に患者と接し実習での学びから目標とする看護師像について記述していた。また看護師の仕事を観察することで自分の看護師になる夢やあこがれが強くなったと記述していた。

2. 実習目標にそった学びについて (表5)

【実習目標にそった学び】の記載率は94.7%で「コミュニケーション」「日常生活援助の必要性・根拠」「バイタルサイン」「環境」「看護師の役割」「報告」「生活行動の変化」のサブカテゴリからなっていた。

「コミュニケーション」(表6)の記載率は77.2%で、最も多かった。

その学びの内容はコミュニケーションの方法、非言語的コミュニケーション、信頼・人間関係、個別性、

表6 コミュニケーションについての学び

() コード数 [] 記載率 (%)

学びの内容	コード例
コミュニケーションの方法 (26) [33.3]	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し同じことを言われても態度に出さず笑顔で接する。 ・会話だけでなくリハビリの作品から患者を知る。 ・患者にわかりやすい表現でコミュニケーションをとる。
非言語的コミュニケーション (24) [40.4]	<ul style="list-style-type: none"> ・会話がなくても傍にいただけでもコミュニケーションである。 ・ただ話を聴き、体をさすったり、共感することによって患者は1人じゃないと、支えてあげることも大切だと気付いた。
信頼関係・人間関係 (23) [29.8]	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の気持ちを尊重し寄り添うことで人間関係ができる。 ・人の心を開き、信頼を得るためにはコミュニケーションの積み重ねが必要。
個別性 (23) [26.3]	<ul style="list-style-type: none"> ・患者一人一人の特徴を知り、個々に合ったコミュニケーションをとることが必要。 ・患者のコミュニケーション能力に応じた意志伝達の方法を考えることを学んだ。 ・そばにいて安心感を与えることが認知症患者とコミュニケーションをとる上で大切である。
対象の理解 (11) [15.8]	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の主観的な意見を挟まず、相手を尊重して肯定も否定もせずに聴くことが大切。 ・患者のことを知りたい理解したいという態度で臨んだことで患者との会話を深めることができた。
その他 (12) [17.5]	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師がかけた一言が患者を不安にすることもあるし、また勇気づけることもあることをきき、言葉の持つ大きな力というものを感じ、言葉の難しさ、大切さというものを教わった。

対象の理解などで、コードは以下の通りであった。

- ・コミュニケーションの方法は、話すスピードや内容を患者に合わせることや、コミュニケーションをとる際に適した距離、患者を知るためにはまず自分について知ってもらうことが必要であるなど記述していた。
- ・非言語的コミュニケーションは、会話することだけでなくスキンシップをとったり、相手の目線や表情でコミュニケーションが図れること、また苦痛を共有することもコミュニケーションであると記述していた。そして言語障害のある患者との意思の疎通に、文字盤を使用した学生もいた。
- ・信頼・人間関係は、患者の訴えを傾聴し患者の人生を理解しようと働きかけたことが、恐怖感を取り除き、安心感を与え人間関係の構築につながったなど、信頼関係や人間関係を構築するためにコミュニケーションは重要で、それがよい看護に繋がると記述していた。
- ・個別性は、実習前半に患者と会話が続かなかったことや受け持ち以外の患者の会話、看護師の助言やカンファレンスでの他の学生の学習経験から、コミュニケーションの手段は患者個々によって違うことが記述されていた。また認知症患者のコミュニケーションで大切なことを記述していた。
- ・対象の理解は、患者を理解するために、自分が患者になったときにどのように接して欲しいか、相手を思いやりながら誠意を持ってコミュニケーションをとることが重要などと記述していた。
- ・その他、言葉の使い方やコミュニケーションは勇気を出し患者だけでなくスタッフと積極的にとらなければならないなど、看護学生としてコミュニケー

ションをとる意義とその際の自分の姿勢についてなど記述していた。

「日常生活援助の必要性・根拠」

患者をよく観察しアセスメントすること、そして患者個々に適した看護とその方法があることを学んでいる。また看護援助を行う際の患者の意思決定や自尊心に留意すること、残存機能を生かし自立を促す方法の必要性などを記述していた。

「バイタルサイン」

患者の理解度に合わせた説明の仕方や実施中の声かけの必要性、患者個々に合ったバイタルサインの正しい測定の手技についての学びがあった。そしてバイタルサインを測定する意義を再度確認していた。

「環境」

ベッドの高さや窓の大きさと開閉についてなど患者の安全面を配慮した環境についての学びのほか、カレンダーなどで患者が季節感を感じられる配慮と自分自身も環境の一部であることなどを記述していた。

「看護師の役割」

看護師と患者の関わりの実際から、患者への声のかけ方やチームで情報を共有し相談することなど、学生が見習うべきことを記述していた。

「報告」

報告するタイミングやその重要性、そして報告することについて責任を持たなければならないことが記述されていた。

「生活行動の変化」

毎日日記を書いている患者を観察し、レクリエーション前後で表情がとてもうれしそうに変化していることを記述していた。

3. 実習に関する緊張・不安について（表7）

【実習に関する緊張・不安】の記載率は38.6%で、「コミュニケーションの難しさ」「実習病棟・場所の特徴」「バイタルサインの難しさ」のサブカテゴリからなっていた。

「コミュニケーションの難しさ」

実習前から年配の人と話す機会がないことや実習の緊張のため、コミュニケーションに対して不安を感じていた。そして実際に患者の反応がつかめずに会話が途切れることがあり、コミュニケーションの難しさや日頃のコミュニケーションの大切さを記述していた。

「実習病棟・場所の特徴」

精神科・閉鎖病棟、認知症のマイナスのイメージや偏見を持っており、実習に行くことに不安を感じていた。しかし実際は明るく自由な病棟の雰囲気を感じたり、また閉鎖病棟は患者の安全性を考慮した看護をするという理由があることを学んでいた。

「バイタルサインの難しさ」

特に血圧測定で正しくマンシュートを巻くことができなかつたり、腕が細く水銀を上げるのに躊躇するなど、手技・方法に時間がかかり患者に負担をかけたことと記述していた。

4. その他の学びについて（表8）

【その他の学び】の記載率は24.6%で、「実習グループでの学び」「その他」のサブカテゴリからなっていた。

「実習グループでの学び」

実習を通してグループメンバーと行動し、互いの意見を出し合うことでよい学びができたことや、今後

も仲間とともに課題を克服していきたいという記述があった。

「その他」

機能訓練の目的や廃用症候群、認知症患者の援助についてなど、受け持ち患者について自分で調べたこと、教わったことを記述していた。

V. 考 察

基礎看護学実習に関する研究は数多く報告され、その方法はレポートの記述内容を分析したものや、質問紙を用いた調査などである⁶⁻⁸⁾。矢口ら⁹⁾は、「レポートには学習者が一番印象深く受け取ったもの、問題意識を持ったものが表れる。」と述べている。このことから学生が、実習前の準備から病棟での患者・看護師との関わり、カンファレンスや学習発表会での学びなど様々な体験の中から、自分でテーマを選びレポートした内容は、学習状況の実情を把握するために、妥当であると考えた。

1. 早期体験学習の学習効果について

早期体験学習の効果について桜井、山口¹⁰⁾は、初期体験実習で学生は看護職の魅力を感じ、専門的技術及び知識の習得や、多くの経験から豊かな人間性を形成することの必要性を感じ、それが学習意欲へとつながっていると述べている。今回の研究の結果からも、「看護師の仕事は大変だがやりがいがあり、私ももっと勉強して、もっと成長して立派な看護師になりたい」というような看護職への憧れや、「患者の方が病気について詳しく自分は勉強不足だった」と反省し、学ぶことや技術練習の重要性を実感し、「看護師にな

表7 実習に関する緊張・不安 () コード数 [] 記載率 (%)

サブカテゴリ	コード例
コミュニケーションの難しさ (17) [22.8]	<ul style="list-style-type: none"> 受け持ち患者の反応がはっきりせず、話も途切れすごく悩んだ。 実習初日は緊張しコミュニケーションどころでなく患者に負担を与えてしまった。
実習施設の特徴 (12) [12.3]	<ul style="list-style-type: none"> 暗く怖いイメージがあり実習に行くのがいやで、患者に対して警戒していた。実習が進むにつれてそのようなイメージがなくなり、自分がそのようなイメージを持っていたことが情けなかった。
バイタルサイン測定の難しさ (9) [12.3]	<ul style="list-style-type: none"> VS測定では緊張し何度も失敗して患者に負担をかけてしまった。 高齢の患者でマンシュートの巻き具合が難しかった。 VSの測定は毎回緊張した。

表8 その他の学び () コード数 [] 記載率 (%)

サブカテゴリ	コード例
実習グループでの学び (6) [8.8]	<ul style="list-style-type: none"> グループのメンバーに協力してもらい練習することで、自信を持って患者と接し、バイタルサインの測定ができた。
その他 (11) [17.5]	<ul style="list-style-type: none"> 痛みを訴えている患者に、安心感を与えることも重要。

るには多くのことを学び、多くの人とコミュニケーションをとり、多くの経験が必要であると学んだ」としていた。そしてこれからは自分と真剣に向き合って、日々努力して自己の能力を発展させ、前に進んでいきたいと記述しており、桜井、山口らと同様の効果が確認できたと考える。また梶田¹¹⁾は真に自立した学習者として生涯にわたって学び続ける者へ成長していくための主要な側面の一部として、「成長・発展への志向」と「自己の対象化と統制（コントロール）」をあげている。「成長・発展への志向」とは現在の自分自身の行動や技能の領域が、より広いもの、より高度なものとなるよう自分自身を上げる志向性をもつこと。具体的には「目標の意識」と「達成・向上の意欲」が必要であると述べている。また「自己の対象化と統制（コントロール）」とは、自分自身の現状と可能性、課題などを認識し、そしてそれが自分の選んだ方向へ自分自身が近づくよう自分に働きかけるという能力である。このことから、学生が今この時期に実習をしたことは、自立した学習姿勢を身につけるための貴重な体験ができたと考える。

飛松¹²⁾らは Early Exposure の効果を1年次と2年次の学生間で比較した研究で、患者との「ふれあい」という点については1年次の方が有意に高かったと報告している。このことから、まだ医療者としての自覚や経験・知識が少ない学生だからこそ対象者をひとりの人間として捉え、真剣に患者と向き合い、そしてその体験が看護師になろうとする学生の動機付けを高めているのではないかと考える。今後いろいろな話題に関心をもち、経験を重ね大学生生活の中で人間性を豊かにしたいという意欲を高めていた。そして看護師の援助を観察することから看護師の役割について学び、目標とする看護師像を明確にしていた。以上から、この時期に行う早期体験学習としての効果が得られていると考える。

2. 実習目標にそった学びについて

学生の多くがコミュニケーションをとれることとバイタルサインが測定できることを目的として実習に臨んでいた。そして実習前から時間外の自主演習を繰り返し復習し、実習中にはグループメンバーや指導者・教員の助言、看護師の援助を参考にして「患者とどんなことを話そうか」「どのように関わればよいか」と強い関心をもって実習に取り組んでいた。一部の学生はコミュニケーションや看護援助がうまくいかず患者から拒否されるなどの辛い経験をしていた。しかし最

終的には患者の反応の変化に気づき、援助技術がスムーズに実施できるようになった自己を自覚して、達成感を得ていた。これは学生自らが成長しようとする主体性の表れと考える。

また多くの学生が看護援助時の説明や生活機能訓練での塗り絵や体操を通して、認知症患者や精神疾患患者は自分よりも経験豊富で、難しい漢字を書いたり計算ができるなどありのままの患者を受け止めていた。そして先入観や偏見をもっていた自己を反省し、看護師として人間として患者と人間関係・信頼関係を構築するために、傾聴すること、対象者を理解し尊重すること、また患者それぞれにコミュニケーションの方法は違うことなど、看護師の基本的な態度について学んでいた。

このほかバイタルサインの測定や環境整備の援助を通して、日常生活援助の必要性や根拠と報告についての学びを記述していた。

生活行動の変化の学びについては、対象者が認知症・精神疾患を抱えた高齢者で、長期入院生活を送っているため、情報収集に困難があることが考えられる。この実習目標については、実習施設の特徴を考慮して、検討する必要性も考えられる。

3. 実習に関する緊張・不安について

実習前および実習中の学生は不安を抱き、緊張していた。看護という職業にあこがれて入学して間もない学生にとって初めての臨地実習であり、早く看護を体験したいという期待を抱く一方、専門知識や技術が未熟であり思い通りに実施できず、自信のない自分を自覚し不安になっていた。広辞苑によると軽度の不安は「正常不安」とよばれ、注意力を高め、学習や変化への刺激となり成長をもたらすと書かれている。藤田¹³⁾は「できるだろうか」という不安は、「やりたい」という気持ちの表れでもあると述べている。以上から考察すると、たとえ学生が不安状態にあるとしても、それがあある特定の目標により引き起こされるものであれば、それはかえって実習目標を意識させ、学習の意欲を高める機会になると考えられる。またドーナ¹⁴⁾は「看護の学習者は自分自身の不安を学習に役立てる責任がある」と指摘しているように、看護を学ぶものにとって自ら不安を体験することは、病気と共に生きる患者の不安を感じとり、相手が必要としている援助を考える機会でもある。しかし不安が常に学習への動機付けになるわけではない。

実習に関する不安のひとつである実習病棟は一般・

老年・精神科で一部閉鎖病棟となっている。受け持ち患者の多くは認知症や精神疾患を抱えた高齢者であり、中には言語的コミュニケーションがとれない患者も少なくない。このような実習病棟・場所に対して実習前の学生は、暗く怖いイメージがあり実習に行くことをためらっていた。そして患者に対して警戒心を抱いていた。このような認知症患者に対するマイナスイメージについて吉本ら¹⁵⁾の研究によると、マスメディアが影響していると報告している。近年、高齢化が進み認知症高齢者の介護テーマにしたテレビ番組や映画が放送されることもある。そこには痴呆症状を呈する高齢者が映し出され、「不可解な行動をする」「こわくかわいそうで自分はなりたくない人」など、介護する家族や職員の苦労や介護の困難さが表現されていることが多い。学生はそこに映し出される痴呆症状を呈する高齢者の姿に影響を受け、マイナスイメージを持っていると考えられる。しかしそのマイナスイメージを持った学生は、病棟の雰囲気から閉鎖の目的を知り、日々患者と向き合いコミュニケーションをとって行く中で、恐怖感や不安が軽減していた。

安酸¹⁶⁾は、看護に対する関心と意欲を高めることが、初めての臨地実習での最大の目的ではあるが、睡眠不足や身体疲労、緊張などの身体症状や、実習することに学生自身が意義を感じていないと好ましい効果は得られないと述べている。この時期は学生にとって入学後2～3ヶ月しか経っておらず、新しい環境に適応していく不安定な状況であると考えられ、教員との関係も十分とれていない時期でもある。そのため教員は学生が不安や緊張を抱え、精神的に不安定な状態で実習に臨んでいることを意識して関わる必要がある。基礎看護学では実習前に2時間かけてオリエンテーションを行うほか、半日かけてバイタルサインの測定やベッドメイキングなど既習技術を個別に指導することで、内発的・外発的動機付けをしている。その上、担当教員が実習目的・目標を達成できるよう、グループメンバーを集めて実習方法を指導したり、実習に向けての不安や緊張など個別に対応していることは、学生の学習効果を高めていると考える。

4. 基礎看護学における今後の課題

早期体験学習の効果を確認したが、この効果がその後の学習過程で長期にわたり継続し、発展していくとは言い切れない。そのため教員は基礎看護学実習後もこの効果が継続するよう、学生が自分自身の能力を評価して課題を明確にできるように関わり、それを達成

していこうとする学習姿勢を身につけるよう講義・演習を展開していくことが重要ではないかと考える。

VI. ま と め

今回、基礎看護学実習Ⅰの実習後の課題レポートを分析して以下の内容が明らかになった。

- 1) 実習に対する不安や緊張を抱えながらも、実習目標にそった知識・技術を習得していた。
- 2) 実習目標の中でも特に看護師として基本となるコミュニケーション技術を学び、相手を尊重し人間関係を構築するために必要な能力への学びがあった。
- 3) 患者や看護師との関わりから、自ら看護師の憧れを具体的な目標に転換し、看護学生としての自覚とその後の学習意欲へとつながる学習の機会となっていた。

以上、レポートを分析した結果がしめしたものについて述べてきた。内容を一文ごとに抽出しているため、その学びがどのようなプロセスで出てきたかは把握することはできない。また当然ながら、記述されなかったことや、学生の記述能力の差、分析者の読み取りの能力や表現力によって限定されている面もある。我々教員は、この学習効果が継続・発展していくような講義・演習の展開の工夫が必要である。又、実習施設の特徴を考慮して実習する必要があることも示唆された。

なお本研究の一部は、第17回日本看護学教育学会学術集会で（福岡）で報告した。

VII. お わ り に

本研究では、基礎看護学実習Ⅰの課題レポートから早期実習の学習効果を確認することができた。しかし89名の学生のうち、了解の得られた57名（回収率64%）のデータの結果である。これは研究の趣旨を説明する際、事前に学生へ周知せずに5限の講義終了後に実施したことが原因と考えられる。今後は対象へ配慮して研究を行っていきたい。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査を快く受けてご協力いただきました学生の皆様に、心からお礼と感謝を申し上げます。

文 献

- 1) 田中美穂, 中原るり子ら. Early Exposureとしての基礎看護学実習Ⅰの検討——学生の自己評価結果から——. 東邦大学医学部看護学科紀要 2005; 19: 37-48.
- 2) 藤井徹也, 門井貴子, 須賀京子. 大学における基礎看護学臨地実習の実習時期とその内容. 日本看護学教育学会誌 2004; 14: 221.
- 3) 高橋清美, 中野榮子. 学生が抱く早期看護実習Ⅰの主観的満足感 内発的動機づけによる実習効果. 福岡県立大学看護学部紀要 2003; 1: 29-39.
- 4) 出口禎子, 宮川晶子, 梶山祥子. 基礎看護学における見学実習の意義 学習動機を高める臨床からの学び. 東邦大学医療技術短期大学紀要 1996; 10: 51-61.
- 5) 前掲1)
- 6) 滝下幸栄, 上野範子. 基礎看護実習における学習内容の分析——実習終了後のレポートの内容分析から——. 京都府立医科大学医療短期大学部紀要 1996; 6: 33-41.
- 7) 野村志保子, 山口瑞穂子ら. 基礎看護学実習Ⅰにおける学生の学び. 順天堂医療短期大学紀要 1991; 2: 1-16.
- 8) 富田幸江, 小林たつ子ら. 基礎看護学臨地実習で捉えた看護学生の看護観に関する検討——看護観レポートの分析から——. 山梨県立看護大学短期大学部紀要 2003; 9(1): 61-73.
- 9) 矢口みどり, 大下静香, 大森武子. 学生のレポートから行動姿勢を読み取る. 看護教育 1998; 39(6): 430-4.
- 10) 桜井礼子, 山口真由美. 看護教育における初期体験実習の経験と意義. 大分看護科学研究 1999; 1(1): 20-6.
- 11) 梶田叡一. 自己教育への教育. 東京: 明治図書; 1991. p.10-53.
- 12) 飛松好子, 本郷道夫ら. 医学教育における地域連携に基づく早期体験の効果——1年次と2年次との比較——. 医学教育 2005; 36(1): 55-60.
- 13) 藤田美津子. 看護教育レポート 初めての臨床実習を前にした看護学生の不安——学習への動機付けとして——. 看護展望 1996; 21(3): 386.
- 14) Mary Ellen Doona, 長谷川浩訳. 対人関係に学ぶ看護——トラベルビー看護論の展開. 東京: 医学書院; 1984. p.299.
- 15) 吉本知恵, 横川絹恵. 看護学生の痴呆性高齢者に対するイメージと看護観および影響因子——3年制看護短大生の学習進度による比較——. 日本看護学教育学会誌 2004; 14(1): 35-44.
- 16) 藤岡完治, 安酸史子ら. 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック. 東京: 医学書院; 2001. p. 8-42.